

いっぱいテキストビュー
(別冊)

みみずの紐

もくじ

ポータル

ポータル

蚯蚓の紐

Background

「高度に発達した科学技術は、我々に真の幸福を与えたもうたか？」

【2039年2月3日付朝刊: 06:01 最終更新】

2036年2月3日に産声を上げ、実運用が開始されたポータル間転送システム（PTS, ポータル・トランスファー・システム）も、いよいよ今日で稼働年数が3年目を迎える。それが社会に齎^{もたら}した恩恵と禍害に対して、我々現代人が目を背けることは絶対にできない。

PTSはご存知の通り、ポータルで結ばれた2点間の瞬間移動による人・モノの高速輸送技術だ。交通・物流コストの削減や、遠距離通勤者の負担軽減、圧倒的な国際間交流の加速など、もはや恩恵の項目は見るまでもないだろう。だがそれと反発するように、技術の急進的な普及が、各種制度上の不備を次々と際立たせた事実は疑いようがない。

その禍害は、数字で見えていくと理解を得やすい。違法ポータル経由による不法滞在者数は昨年度比で300パーセントを超え、輸送・運送系業種全般における失業率は平均40パーセントを超過し、従来の通勤時間と同時間がそのまま残業時間に割り当てられた労働者は、過労を原因として500人に1人が失踪もしくは自死を選択する。

このように市民の権利が淡々と搾取されていく一方で、新生GAFA^{*1}をはじめとする巨大プラットフォームの成長率から、彼らがポータルに基づいて莫大な収益を挙げているという事実は、もはや公然の秘密と化している。

数々の災厄をもたらすこの最新技術に対し、果たして我々はこれを「パンドラの箱」以外に何と呼称を与えれば良いのだろうか？

*1 2020年代に発足した、巨大プラットフォーム同士による合理化カルテルを指す俗語。前年度にFacebookがGAFAから降格したため、2039年現時点におけるGAFAはGoogle, Alibaba, Foovar (旧社名はUber), Amazonの4社を指す。

昨年は 2038 年問題*2によって、システム上での不具合が多発したのも記憶に新しい。これらの社会問題を生み出し続ける技術者たちに、今こそ聞きたい。

果たして私たち一般市民は、新しい科学技術に対する全面的な信頼によって、本当に幸福を享受できるのか？

＊

「んなこと言われても、ねえ」

槍玉に挙げられてしまった一介の PTS エンジニアは、やれやれと肩をすくめました。

新技術で職を失った人間もいれば、当然それで飯にありつける人間もいます。わたしは辛うじてその後者にしがみつけたという、ただそれだけの話なのです。

目の前で紙をくしゃくしゃにする素振りをする、固有モーションを腕時計のセンサーが検知し、網膜投影されていた電子新聞がトラッシュアイコンへと吸い込まれていきます。

《ひょっとして今朝は、イライラしていませんか？》

「別に」

《生理周期予想日を 3 日前倒しに修正しました》

「あいかわらずデリカシーのかけらもないシステムね。新聞おわり」

《新聞読了。続いて餌やりの時間です。出勤まで残り時間 5 分》

部屋内蔵のスピーカーを介し、無機質なボイスアシスタントに次の行動を促されました。椅子から立ち上がろうとしましたが、視界が一瞬ゆらめくと、身体が一気にふらつきます。

*2【単語解説: 2038 年問題】計算機内部での時刻を 32 ビットで扱っているシステムで発生する、仕様上の問題。その最大値である 2038 年 1 月 19 日 3 時 14 分 7 秒以降の時刻をデータとして取り扱うことができないため、システムはこれを参照した瞬間にエラーが発生する。大企業では事前に十分な対策が練られたものの、システムの緊急停止及び対策が事実上不可能な中小企業では、営業停止に追い込まれるなど大きな影響を及ぼした。

《警告。警告。体調不良。過労、睡眠不足が原因と推測》

これはまずいことに、過労を検知されてしまいました。速やかに睡眠欲求を正常値まで戻さないと、健康監理官に救急車を呼び出され、直ちに強制入院させられてしまいます。

わたしは速やかにポケットからペインレス・ディスポーザブル・ニードル無痛皮下注射装置を取り出すと、馴染みのコーヒーフレーバーを装填し、腕をまくって装着し、10秒かからずにかフェインをキめました。同期は効き目の強いエナジードリンクフレーバーを常用すると聞きますが、わざわざ余命を縮めてまで勤労に励む気は毛頭ありません。

《体調の正常化を確認しました、大丈夫のようです。朝のタスクを続けてください》

体感的にはもう1時間ほど睡眠が必要なようです。明日以降は少しずつ就眠時間を調整していきましょう。

「ほーらハムカツちゃん、ごはんだよ〜」

ラックからひまわりの種お徳用パックを取り出して、愛ハムの住処にコロコロと流し込んでやります。白磁器の小皿に1粒、2粒と硬い殻がぶつかり、チリチリと冷え切った空虚な音だけがケージ内に響きました。

ここ数日、ハムカツは奥のねぐらに引きこもってばかりで、車輪を回そうとする気配も感じられません。我が家に迎えてもう2年。ぼちぼちにひっそりと、ぼっくりと、寿命に従って亡骸へと姿を変えるのでしょうか。

ではもし仮に、このジャンガリアンハムスターが死ぬとしたら、わたしは次にどうするべきでしょうか？

まず行く先は動物病院？ それとも保健所？あるいはハムカツの亡骸を新聞紙に包んで、一般ゴミにまとめて処分するのがよいでしょうか？ いや、最近ゴミステーションにはガベージ・ディスティンクイッシャー廃棄物内容検知器が設置されたはずなので、これに騒がれても面倒臭いですね。

ペットの葬儀をわざわざ頼む時間も予算もこの日常にはありません。自分の手で亡骸を処理するにしても、火葬か土葬は必要になるでしょう。とすればバーナーかショベルが必要になるから、今日のうちにアマゾンに尼で注文して……。

わたしはハムカツの行く末について一通り考えた後に、もしこれを今日実行しようとするで金銭・時間的に大きなコストがかかるだろう、という合理的な判断にゾッとしました。

確かにわたしはペットを育てる人間としては紛うことなく不適合であり、生物のいのちを軽率に扱うような行為には当然恥を知るべきなのでしょう。

ハムカツとの思い出を振り返って、涙が出れば好ましい。

会社へ連絡して忌引を取得できれば、なお好ましい。

今この瞬間に全てを投げ売ってでも、ペットの命を救おうと努力するのが、きっと好い飼い主のあるべき姿。

でもここで、今ここでハムカツの死を受け入れた瞬間のわたしに、一体どのような感情が沸々と湧き上がるのか、(あるいは特に何も感じないのか) 時間に追い詰められているこの現状で真実を知る行為が、とにかく恐ろしくて恐ろしくてたまらないのです。

いよいよハムカツが今際の際になったこの局面で、わたしは最低の飼い主であったという事実が露呈しつつも、(なんとも浅ましいことこの上ないですが) それに直面する行為を、感情のどこかで否定していたのです。

ケージを少し開け、手を突っ込んでそっと指を伸ばし、軽くハムカツに触れました。それはまだほんのりと温かく、弱々しい脈を打っています。

ハムカツは生きている。だから昨日や一昨日と同じように、わたしは今日もまた様子を見ておくことにしたのです。

《餌やり終了。まもなく出勤時間です》

そういえば。

今更ながら思い出した事実に、対して面白さも感じない、乾いた笑いが漏れ出します。ペーパーレス化した我が家には、もはや包んで捨てるような新聞紙が1枚も残っていないのです。

＊

玄関口の開錠と共にどんよりとした朝日が全身に照射され、思わず目を背けました。集合社宅の最上階に差し込む陽射は、今はただ吐き気を催すばかり

りに不愉快です。眼下に広がるネズミ色の都市には、姿形が寸分も変わらないネオ団地*3たちが、今日も規則正しく等間隔に整列しています。

ああ、今日もくそったれな街にふさわしい、くそったれな仕事が待っているのです。わたしはお天道様の陽光から背けるように、コンクリートのらせん階段を一段ずつすっ飛ばして駆け下りました。

昨年新調してピカピカだった石彫のエントランスは、今は見る影もなくコンクリが露出し、まるで廃墟と化してしまいました。このエントランスですが、なんでも御影石などをふんだんに使い、下手に景気よく作ってしまったものですから、噂によると、スラム街のポータル難民によって毎晩毎晩少しずつ盗まれているんだそうです。

つくづく見栄というのは、張るものじゃありませんね。

＊

しばらく歩くと、いつもの人だけが見えてきました。

人、人、人の群れ。皆行き着く先は、ポータル駅へ。

はるか彼方に見える、たった6台の交通用ポータル駅に向けて、今朝も数百の黒いスーツの群衆が、何度も何度も折り返しながら長蛇を形成していました。

かつて2030年代初頭まで広く利用されていた交通機関である電車*4では、毎朝連日のように超満員が発生していたと父から聞いたことがあります。

今ではこのように、なんと、たったの1時間ほど行列に並ぶだけで。通勤満員に巻き込まれることなく、大変スムーズに目的地まで瞬間移動できるようになった、というのが東京都における劇的な通勤改革だそうです。

つくづく見栄というのは、張るものではないと分かりますね。

*3 2021年の東京五輪終了後、一般向けに開放された晴海の超巨大団地（元選手村）を指す。都内で大人数を収容可能なうえ維持費が安価なため、もっぱら大企業における社員寮として利用される。

*4 2030年代中頃にJPR（Japan Portal Railways）管轄の駅は全駅がポータル間転送方式に置き換えられたものの、現在でも地方の私鉄や、一部の郊外では未だに電車が現役で動いている。

突如チリンチリン、という後ろから音がしたので、無意識に身体を躲しました。

直ちにメッセージバッグを肩に引っ提げたサングラスの男が、ロードバイクで颯爽とわたしの右脇を追い抜いていきます。今朝の記事にも書かれていましたが、電車もバスも航空機も事実上廃止される中、改めて自転車が再注目され、若者を中心にブームを巻き起こしているそうです。この行列へと並ばずに出社できるだけでも、なかなかありがたいものですね。

次のボーナスで、ちょっと身の丈にすぎるほど自転車の購入を検討してもいいかもしれません。脳内で金策を練りつつ「ポータル最後尾」の看板を目指し、わたしはスタスタと走り抜けます。

＊

レティナル・プロジェクション

網膜投影の画面を死んだ目で淡々と空中操作する、まるでクローンのような労働者たちは、1分ごとに2,3歩ずつ歩みを進め、およそ10分程度経過で列を折り返すので、わたしも只々、歩みをそれに合わせ続けます。ただひたすらに自分の番を待つという、大変に興味の薄い手続きを繰り返す中で、わたしは今朝どこかで目にした「幸福」という単語に対し、うつらうつらと揺蕩う意識に突き刺さる、小骨のようなつかかりを感じていました。

確かにPTSの登場によって、わたし達は近所を散歩する感覚で、北海道にも沖縄にも行けるようになりました。そう、それは間違いなく便利にはなったはずなのです。しかしそれは必ずしも、幸福に直結するのでしょうか？

便利であるならば幸福は、常に真ではないのでしょうか？ では幸福とは何なのでしょう？ 行列に並ぶため毎朝7時に家を出て、深夜12時にまた行列へと並ぶわたしは、果たして幸福なのでしょう？ 満員電車に乗ることは不幸なのでしょう？ 行列に並ぶ行為は幸福なのでしょう？ それならわたしは、誰を幸福にするため仕事をしているのでしょうか……？

「ほら、次はアンタの番だよ！ 何ボサっとしてるのさ！」

立ちながら入眠へと誘われかけていた意識が、瞬発的に覚醒しました。駅ポータルの列整理を担うパートのおばちゃんです。

花柄のエプロンを纏ったおばちゃんは無味無臭なスーツ集団においてあまりにも異質な存在であり、自身の指示に従わない者に対してはあまりにも感情的で高圧的な態度をとることから、彼女は多くの通勤者から畏怖の対象として敬遠されています。わたしが昔から一番苦手とするタイプの人間の一人です。

「あ……わたし、ですか？」

「アンタの目の前に人がいなきゃ、誰がどう見たってアンタの番だよ！ ほら、後ろもつかえてるんだからさっさと支度しな。ほら入って、5番ポータル！」

「はい、すみません……」

睡魔が全身を支配している時に赤の他人から叱られると、20代後半を迎えた自分が無性に恥ずべき存在のように思えてきます。だから鼻の奥がツンと熱くなって、人目を偲んで泣きたくなくなるのです。

ああ、ちくしょう。このおばちゃんは、一体誰がこのポータルを設計・開発・運用しているとも思っているのでしょうか。

＊

5番の一人用ポータルルームは久々に利用しますが、その構成はおおむね昔の証明写真機を思い起こすような造りをしています。3メートル四方の無機質な白い部屋に、尻を冷やしそうなアルミ製の丸椅子が中央に1つあり、それがブルーライトで照らされていました。ガチャコン、と鈍い金属音が響きます。

『はい、ジャロック掛けたから！ ちゃちゃっと行き先指定して頂戴』

出入り口の小さな扉は、外からおばちゃんが門のようなもので施錠し、中の人間が転送されるまで開錠しません。わたしは今まで閉所に対して恐怖心を覚えたことはありませんが、もしそのケがあったならば、この時点で既に断念していたでしょう。

《定期券、またはお金を投入してください》

正面のモニタに表示された文字列を、合成音声ガイダンスが読み上げまし

た。それに連動して正面の IC カード接触面、及びコイン投入口と紙幣投入口が青白いランプで点滅します。

さて、定期券を……。と右ポケットをまさぐってから、愕然としてしばらく一歩も動けませんでした。

《定期券、またはお金を投入してください》

ありません。定期券も、財布すらも、指先に触れません。段々思い出しました。昨夜履いていたスラックスは今も玄関口で脱ぎっぱなしの状態にあり、こいつは乾燥機に突っ込まれていた別のスラックスです。

《定期券、またはお金を投入してください》

始業までは残り 10 分。今から定期券を取りに帰れば、確実に間に合わないでしょう。となれば今から連絡し、午前半休を取得してから……いや、ダメですね。今の火災プロジェクトは今日の午前中から消火を始めないと、破綻する可能性が確実に高まります。となれば準欠勤……しかし今から取りに帰ったとしても、行列のラッシュは今からがピークとなるため、往復で 2 時間はかかるでしょう。勤務開始から 2 時間を過ぎると自動的に午前半休が適用されるため、今度はサビ残禁止規定によって出勤できなくなります。ええっと、どうすればいいでしょうか、こういう時はどうすれば、どうすれば……。

《定期券、またはお金を投入してください》

『ちょっとアンタ！ 早くしてもらえないかしら？』

外から声が漏れ聞こえました。モニタが、合成音声で、ドンドンと扉を叩く音が、わたしの心理状態をじわじわと追い詰めていきます。

……そうだ！ ひょっとしたら昨晚、わたしは自分でも覚えていないうちに、定期券をポケットから、ハンドバッグに、移して、いた……かもしれない。

わたしは蜘蛛の糸に縋るほどの淡い期待に依存し、きっと客観的に見ても冷静さを欠いていると思えるほどに、ハンドバッグの中身を盗人のごとく掘り漁りました。当然ないものが見当たるはずもないのですが、その時ハンドバッグから零れ落ちた、黒い合皮製のポシェットに貼り付けられた、ポロボ

口のシールの「合鍵」という文字列は、わたしに一つの天啓を教授しました。

さて、それをやるべきかという刹那の躊躇^{ちゅうちよ}は全身を強張らせましたが、直ちにそれはやるしかない、という決意として原動力へと昇華されました。

すなわちそれは、定期券がなくて通常利用できないならば、デバッグモードに突入すればいいじゃない、という発想です。

わたしはまず、ポータル管理ユニットの鍵穴を探しました。ユニットの鍵穴は製品によって異なり、一般には見つかりにくい箇所、例えばこのように、例えばコインベンダーの底面の裏側などに取り付けられています。

次にポシエットの鍵束から「関東地区交通ポータル・デバッグ用」と書かれたネームシール付きの鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで半回転させると、デバッグモードが自動的に起動し、管理者用端末がモニタ全面に広がりました。

《デバックモードへようこそ、まずは管理者と鍵登録データを照合します。それではお名前、秘密の質問、4桁のピン番号、顔認証を続けてどうぞ》

わたしはマイクに向かって氏名、飼っていたペットの名前、母親の旧姓、小学校の担任の名前、ゴ、ク、ロー、サンを高速詠唱し、カメラに向かって虚無の笑顔で空虚なピースをバッチリ決めました。何故か笑顔でピースを決めないと、この顔認証は成功しないのです。誰が何のために実装したのかも知りませんが、そういう認証の仕様になっているのです。

《マルチ認証成功。ポータル転送テストを実行しますか？》

「はい」

《ではポータル座標をマップから指定してください》

モニタには日本の白地図が全面に表示され、その上から国内に存在する五千以上の公認ポータルが、赤色のピンとして突き刺さりました。「大丈夫、本番で使わないから！」と誰かが言い出し、下請けのテストコードを流用して実装されたこの地獄のようなユーザーインターフェースには、毎度のことがらため息をつかされます。

文字列検索を諦め、関東地方をズームしようとしたわたしは、ふと、太平洋の中央から少し南で点滅するピンに関心を奪われました。

ハワイ島でもモアイ島でも、そもそも日本の排他的経済水域内ですらありません。こんな海のだ真ん中にポータルなどあったのでしょうか？

これではまるで……と言いかけたところで、己の荒唐無稽な思いつきにハッとさせられました。それは父の愛読書、月刊ムーの名を冠する、あのムー大陸があった場所に他ならないからです。

まさか、ムー大陸にポータルが？

いやいやいや、冷静に考えてそんなわけあるはずがありません。おそらくはGPSの座標バグか、もしくはテスト用にポインティングされたまま残った仮ポータル座標と見なすのが筋でしょう。

ですがもしこれが、無人島などに設置された違法ポータルの一つだった場合は、我々PTS開発者はPTS監督庁に対し報告の義務が生じます。だとすれば、ちょっとここまで転送して、現地を確認して、会社に報告すれば、特に準欠勤のペナルティが生じることはありません。だからわたしがこのポータルを調査する行為に対して、何ら越権性はなく、違法性もなく、業務上の問題はないのです。

要するに、理由込みで、公的に、やむを得ず、仕方なく仕事をサボれるということになります。

《座標 JP-5963 を確認。ポータル間転送テストを開始してもよろしいですか？》

「はい」

勢いで一線を超えてしまう行為というのは、大概その一步を踏み出してから猛省を始めることになります。ああ、あの炎上プロジェクトはもはや収まりがつかないんだろうなとか、これが長期出張になるんだとしたらハムカツの面倒を誰かに頼んでおけばよかったとか、次々と浮かび上がる世俗の込み入ったしがらみ達を、当然ながらPTSが汲み取るはずもありません。

部屋がより一層青白さを増し、タービンの回転音が激しくなり、画面のバックライトが点滅を繰り返すと、わたしの視界は徐々に光で侵食され、とうとう何も見えなくなりました。

*

《転送終了。お疲れさまでした》

辿り着いた先は常夏の楽園とはほど遠い、四方八方がコンクリートで囲まれ、椅子だけが中心に据えられた無機質な部屋でした。眼前には押し戸か引き戸かもよくわからない、壁から長方形に切り取られた境界面が鎮座するだけです。

わたしはその先に広がる光景へ若干の期待を寄せつつ、転送酔い*5を軽減するため少し深呼吸を挟んでから、ドアノブに手をかけ、力を込めました。

蝶番から発せられたギギーッと嫌な金属音は、眠りにつくまで耳にこびりつくような予感がしました。その先の薄暗い部屋には、かろうじて生活環境が整っているにも関わらず、殺風景さという点では先程の部屋よりも優位に思えます。

壁に取り付けられた6つの大型ディスプレイモニタからは各々が異なる画面を延々と出力し、それらを体育座りのまま虚ろな目で眺める少女が佇んでいました。その少女が纏っているボロボロの布切れ1枚は、高価なディスプレイモニタと比較すると、どうにも生活水準がちぐはぐに思えます。

とりあえずは、現地人とコンタクトを試みるどころから始めてみましょう。現代地球人の99パーセントは、英語、スペイン語、中国語いずれかの言語が通じる、とされています。

「Excuse me? Buenos dias? 你好?」

「Góðan daginn! Hvernig hefur þú það?」

さて、困りましたね。挨拶のようですが、これは初めて聞く言語です。

「ああ、通じないかな。どうしようかな、ええと……」

リアルタイム自動翻訳アプリを網膜投影で呼び出そうとしたところ、やせ細った華奢な身体の少女は、顔だけをクルリとこちらに半面向け、クスクスと笑みを浮かべました。

*5 ポータル間転送では目的座標とのズレが生じるため、転送直後に平衡感覚の乱れを原因とした転送酔いが発生しやすい。一般には何回か転送を経験することで慣れる

「ああ、ごめんウソウソ。それにしても……君という奴は、本当にこんなところまで来ちゃうんだねえ」

Problems

わたしがその少女に対して抱いた違和感をただ一つ挙げるとすれば、妙な馴れ馴れしさでしょうか。

初対面にも関わらず、その口ぶりは聞き間違えを疑うほど妙に馴れ馴れしいそれでした。いや、そもそもこの異国の地で日本語が問題なく通じるという点に対して、最も違和感を抱くべきだったのでしょうか。

「なんだ、普通に日本語が通じるのね。ええと、実はポータル転送に失敗した結果、こちらに飛ばされてしまったみたいなの。すぐに戻りたいんだけど……ええっと、座標情報だけ教えてもらえるかな？」

「やだなあ、とぼけちゃってえ。君は自分の意志で此処に来たんだ、それを否定してはいけないよ」

「はあ……」

この少女の馴れ馴れしいだけでなく、堂々たる口ぶりは一体全体、どういう自信の現れなのでしょう。別に生意気とかそういうのではなく、妙に心がざわついて、不安感を覚えさせられるのです。

「ごほん。えー、単刀直入に申し上げますと、ここは国営ではない違法ポータルの可能性が非常に高いため、ポータル実地調査として伺いました。お嬢ちゃんはおいくつ？」

「数えて13になる」

「1人？ ご両親は？ 大人の人はいるかしら？」

「いや、僕しかいないよ」

「そう、今はいないのね。それじゃあわたしの名刺を渡すから、大人の人が帰ってきたらこれを渡してくれるかしら。名前は……」

「大丈夫、知っているよ。君の事情なら何でも知ってる。調査というのは体の良い言い訳で、君は仕事が嫌になって此処に来たんだ」

「はは、一体何を……」

「いや。それとも、飼っているハムスターが生死を彷徨っていて、気分が減ったからかな？」

「……えっ？」

脳で言語を認識するのが一瞬遅れてから、得体の知れない恐怖という感情が、堰を切ったように流し込まれます。

「ひっ！」

思わず足が一步退き、部屋に転がっていたアルミの空き缶を蹴飛ばします。どうして友人にもまだ話していない、わたししか知らない事実を、この少女は知り得ているのでしょうか？

「どっ……どっ……」

「どうしてそのことを？ そりゃ簡単さ。僕は神様だからねえ、何でも視られるんだ。ほら、3番モニタを眺めてごらん」

自らを神とのたまう不遜な少女は、キーボードを高速で叩き、右上から3番目の高解像度の大型ディスプレイに何らかの映像を出力しました。

「ほら、この人物に見覚えはないかい？」

「え……これって、係長？」

「ペコペコ頭を下げて、まるで水飲み鳥みたいじゃないか。どうやら今日の無断欠勤がきっかけとなって、君の労働状況がより上の人間にまで伝わったそうさ。それにしても、君の勤務記録というやつはすごいねえ、三六協定もどこ吹く風じゃないか」

「あ、そうなんだ……え、これって、監視カメラ？」

「うーん……そうとも言えるし、そうでもないかな。まず地球の緯度経度からチャックを指定して、そこから三軸でカメラ座標を詳細に設定すれば、地球上どこであっても概ね観測はできるよ。でも監視とは人聞きが悪いねえ。せめて観察カメラと言ってくれないかな」

「はぁ……」

なんでしょう。一見すると歯車が噛み合っているように見えて、そもそも歯が一段ずれているようなこの会話は。

「と、いうことで。おめでとう、どうやら君が今日会社に出社する意味はなくなったようだねえ」

「はあ、どうも……」

「それじゃ、これで安心して本題に入れるね。時間は貴重だ。僕は君に話したいことがあり、おそらく、君からも僕に聞きたいことがある」

「ええ、まあ何にせよ、このまま家には帰してくれないんですね」

「すまない。でもここを取り違えると、二度と取り返しがつかなくなるかもしれないからねえ。こちらも慎重にならざるを得ないんだ」

「もし取り返しがつかないと、どうなるの？」

「最悪の場合、両方死ぬ」

「……いやいやいや。死ぬのは流石にちょっと」

「君だけじゃないねえ。君の友人や家族全てを巻き込んで消滅し、僕は処刑される」

少女がクルリともう半回転すると、右目の箇所にある黒い眼帯が顕になりました。包帯ではなく、眼帯。まだ年端もいかない少女が片目を失明しているという事実そのものが、この荒唐無稽な妄言に対して妙な説得力を与えているようにも思えます。

「……分かった、とりあえず今は。だけど、わたしからすると、何を貴女に尋ねるべきなのか考えあぐねています」

「なんだ。それなら ^{ミズガルズ} Miðgarðr が生み出した便利な道具があるじゃあないか、5W1H というやつだ」

「ミズ……？ 5W1H と言うと、What とか Why とかですか」

「そうそう。君はただ、それに従って僕に質問をすればいい」

「要は 5W1H で質問しろってことですね。それじゃあ……」

この奇っ怪な少女のペースに巻き込まれてはいけません。わたしは落ち着いて部屋を見渡し、この狭い部屋の約半分を占める巨大な黒い箱を指差して言いました。

「これって、なんですか？」

「これかい。これはねえ、計算機だよ。いわゆるスパコンと思ってもらえば

いい」

「目的は、さっきの観察とやらのためですか？ NSA の PRISM *6みたいな」

「詳しいねえ」

「エヘン。父がムー読者ですから」

「だけど、それもちょっと違うんだよねえ。そもそも、この中に ^{ミスガルズ} Miðgarðr が入っているんだ」

「……さっきからその、ミズ何とか……っていうのは一体？」

「ああ、そうか。これはこっちの用語だったねえ。ミズガルズっていうのは人間界、つまり、君たちの世界のことだねえ。僕ではなく、君によって定義される世界とも言える」

「え、なんて？」

「ふーむ、そうだねえ……例えば、君はゲームを嗜むかな？」

「それなりには」

「ゲームの世界には、主人公以外にも数多くの NPC（ノンプレイブルキャラクター）達が住んでいる。彼らは自分が生まれつきゲーム世界の住人であるか、それとも自分が何者かによって作られた NPC の一つなのか、どれだけ時間がかけたとしても、どちらであるかを識別できない。だからゲームのステージそのものが、彼らにとっての世界に相当する」

「なるほど」

「ではここで質問。今まで『君』には識別できたかい？」

「え？ 識別って、まさか……」

「ああ、その通り。手っ取り早く言うと、君たちはこの箱の中身で動く ^{シミュレーション} 模擬実験だ」

「やっぱり……」

「おや、知っていたのかい？」

「ええ、やっぱり『ムー』のシミュレーション仮説特集は本当だったのね」

*6 アメリカ国家安全保障局（NSA）が民間人の通信を監視するために利用していたシステム。エドワード・スノーデンが内部告発によってその存在を明らかにした。

「あ、そこはムーを信じるんだね。ええっと、その、大丈夫？ 事実にはショックを受けたりしていない？」

「ええ、もちろん。要するに、貴女が言いたいのは、わたしは『マトリックス』のネオだったってことでしょ」

「別にそこまでは言ってないけど」

「えっ、ひどい……」

「あ、そこはショックを受けるんだね。ごめんね。じゃあそういうことにしておこうか……」

「ふふ、平凡な日常を送っていたわたしがある日世界の真実を知る。ベタな展開だけど、悪くない心持ちね」

「なんだかなあ……」

「それはさておき。貴女達の科学技術というのは、こんなシミュレーターを作れるぐらいなんだから、よっぽど高度なんでしょうね」

「まあ、流石に君たちの時代よりはね。文明比較曲線でプロットすると、君たちの文明が我々の文明に到達するまでは……あと 100 年ってところかな」

「じゃあそもそも、何で 100 年遅れの文明なんかシミュレーターで動かしてるのよ？」

「いい質問だねえ。何でだと思う？」

「えっ、知らない」

「簡単に言うと、文明をサルベージするためだ」

「はあ、サルベージ……」

「経緯から話そう、神族……つまりこっちの世界の住人たちは、新しい文明を広く普及して発展させるために、過去の文明が生み出した技術・思想・道徳などの発明物を、その都度全て破壊していった。いわゆる創造的破壊クリエイティブ・デストラクションというやつだ」

「いいことじゃないの」

「ところがそうでもなかったんだねえ。その時代における最善の手段しか記録には残らず、それ以前の過程段階は記憶にすら残らなくなる。そしてある日、Ragnarökラグナレクが全てを洗い流した」

「ラグナレク？」

「大戦争さ。地上では大火災が発生し、発明を生み出した技術者達もろとも、何もかもが^{スルト}Surtrの業火に飲み込まれてしまった」

「あらま、それは一大事ね」

「その結果、見事に文明と技術の関係が逆転してしまった。高度に発達しすぎた技術は、焼け跡に残された現代文明をとくに追い越してしまったんだ。例えば、神々は月の周期を正確に予想する高度なシミュレーション装置を持ちつつも、それを構成するために必要な集積回路の作り方も、プログラミング言語を生成する技術すらも持ち合わせていない。だが神々はその利便性を放棄することができず、正体不明の『何か』^{ブラックボックス}が壊れるまで何百年も未だに使い続けている。誰かが使い方を忘れればそれまでなのに、修理ができる神も人間も存在しないのに、ただ便利だから、という理由で使わざるを得ないんだ」

「さっきどこかで聞いたような話ね」

「さて、そこで僕たちの出番だ。我が師^{オーディン}Óðinnから勅令を受けた僕は、シミュレーター上に完全なミズガルズを再現し、人類の歴史が過去に歩んだ思想や技術を、定期的にサルベージしているってわけなんだ」

「へー、凄いじゃない」

「まあぶっちゃけると、ただの使い捨ての駒なんだけどねえ。僕は責任問題が発生した時、いつでも首が飛ばせる要員なんだよ」

「若いのに随分と達観してるわね……」

＊

「はい。じゃあ、わたしから次の質問をします」

「はい」

「貴女は何者？」

「そうだねえ、君たちにとって僕はこの世界を創造し管理する者、すなわち神ということになる」

「まあ言い過ぎではないかもね。いつの世だってシステム管理者は常に偉い

ものよ」

「一方で、この世界における僕の身分は^{スレーヴ}Præll……つまり、奴隷だよ」

「え、奴隷なの？ 神なの？」

「そうだよ。僕は文字を覚えるよりも前に計算機の操作方法を学ばされ、十の時からミズガルズを死ぬまで管理する義務を背負っている。ああ、ちなみにこの死ぬまでっていうのは文字通りで、このミズガルズが動作を停止した場合、僕は責任を取って生贄に捧げられるだろうねえ」

「まあ、なんて野蛮な……。どうせ死ぬと分かっているなら、ポータルでも使ってどこかに高跳びすればいいじゃない」

「君には、この建物の入り口が分かるかい？」

「え……？」

「無いんだよ、どこにも。この部屋から唯一外界に通じているのは、そこの^{ビフレスト}Bifröst……君たちが言うところのポータルだけで、僕はこの足枷がある限りポータルが使えないんだ」

彼女はそう言って、紐状の紋様で彩られた銀の足枷をちらりとわたしに見せました。足枷から伸びた鎖の先は、部屋の片隅にあるレンガの壁にしっかりと埋め込まれています。

「ポータル間転送は完全密閉空間でないと使えないからねえ。この鎖が扉に挟まれば、僕がここから抜け出すことはない」

「そんなのって……」

「ああ、大丈夫大丈夫。君が思うほど、僕はそこまで今の人生を悲観してはいないよ。僕はもともと人嫌いだから、ぼっちは慣れっこだし。その日食べたいご飯をリストに記入して看守に連絡すると、だいたい希望が通ってポータルで送られて来るし。それに、この部屋でしか味わえない最高の娯楽というものがあるってねえ。分かるかい？」

「娯楽？」

「人間観察だよ。約七十七億人の人間によるシミュレーションをぼんやり眺めるのは、どれだけ時間をかけても飽きが来ない。あ、もちろん君も観察対象の一人だよ」

「勝手にわたしの人生を覗かないで頂きたいわね。じゃあ辛くはないの？」

「まあ僕は目的がある分、奴隷の中でも随分と恵まれた立ち位置にいるからねえ。路端で野垂れ死ぬ奴に比べれば遥かにマシさ。ただ、孤独なのは辛いねえ。誰かと話がしたくてたまらない欲求だけは、どうにも耐え難いかな」

「こっちの人とか……神様だけ？ とは話さないの？」

「ないね。ときたま監視役の人間が様子を覗きにはくるけど、あくまで事務的な経過報告だけだ。彼らに対して雑談が弾むことは決してない。ましてや神々と会話なんておこがましいねえ、うん、それこそ絶対にない。死刑執行を待ち続ける拘置所よりも、毎日働かされる強制労働所よりも、遥かに人間が狂いやすい環境を君は知っているかい？」

「さあ……」

「それは独房監禁だ。孤独というのは、僕たちのような人間にとって、恐怖よりも、痛みよりも、遥かに耐えがたい苦痛なんだよ」

「はあ……」

「まあ君の反応はそうだろうね。今この会話も君にとっては他愛の無い、日常に数ある会話の一つかもしれない。だが僕にとっては、3年ぶりに、やっとのことで素潜りから水面に顔を上げられたような、酸素が身体に流れ込むような。そんな充足感に満ち溢れているんだ」

「まあそりゃ……3年もこんな空間に閉じ込められてちゃそうなるのも当たり前よ」

「無駄話が過ぎてしまったねえ。ということで、勝手に When と Where に対する回答もしてしまったかな。我々の文明はおよそ君たちより 100 年先を進んでおり、ここは一度入ったら一生出ることができない鉄の棺桶。まあ僕の身の上話を長々語ってもしようがない。さて、君からそろそろ聞いちゃあくれないか」

「何を？」

「Why だ。何故君をここに呼び出したのか、について」

「よっぽど聞かれないのね。じゃあ、どうして？」

「まずは背景知識だ。君は、ポータル間転送の基本原則を知っているかい？」

「ポータル？ たしか、社員研修でやったわね。確か 2025 年……に帝京令和大学*7の研究チームが 10 センチのテレポーテーション実験に成功して、そこから開発が始まったんじゃないかな。それがどうしたの？」

「その通り。彼らは現在ノーベル賞の最有力候補とも言われているが、実際のところ、ポータル間転送という技術には常に疑惑がつきまとっている。なぜ日本発祥の技術とはいえ、東大や京大ではなく研究費が遥かに低い帝京令和大学から誕生したのか？ なぜ日本の国内の研究機関では成功している追実験が、国外では全て失敗するのか？ なぜ論文投稿数が最大とはいえ、ポータル技術の国際学会が日本で開催され、しかもそのほとんどが日本語論文だったのか？ 実はポータル関連技術というのはエセ科学として糾弾する科学者も存在するぐらい、君が大好きな陰謀論にまみれた研究分野なんだよ」

「べ、別に陰謀が好きなのでは……」

「さて、では何故これほどまで生活へと浸透しているにも関わらず、ポータルという技術の全貌が明らかにされないか？ それはね、ポータル技術がシミュレーション仮説と深く密接するから。つまりポータルの全容を明らかにするためには、自分たちがシミュレーションの一部で動いている事実を証明しなければならないんだ」

「だんだん頭がこんがらがってきたわね。なんでシミュレーションとポータルが……」

「話を整理しよう。まずポータル間転送とは、ある物体 X を座標 P から座標 Q に移動させる技術だ。このやり方は、現在の『X が P に存在するシミュレーション』を一度サスペンドしてからスナップショット（一時記録）を取得し、このうち X だけを座標 Q に動かしてから再度読み込み、『X が Q に存在するシミュレーション』を実行している。X のカットアンドペースト、と言えば君ならすぐに理解がつくだろう」

「あー……はいはい、なるほど。理屈は分かったわね。だから貴女達がポー

*7 前身は帝京平成大学。令和初期はコンビニにおけるプロモーション活動で有名な大学だったが、現在では国内でも有数のポータル研究機関として名を馳せている。

タルを自在に扱えるのは分かったわ。でも……」

「何故君たちシミュレーション上の人間がポータルを使えるか、だね？」

「そうそう」

「その質問に答えるためには、^{アドイン}拡張機能の説明をしよう」

「アドイン？」

「研究者、発明家、政治学者、哲学者、思想家……ある日彼らの生み出した発明によって、人類の生活は劇的な変化を迎える。だが例えば、石器時代にフェルマーの最終定理を証明するような人間が現れないように、発明というのは必ず文明の発達に沿い、^{パラダイムシフト}需要に合致した形で生成されている。つまりは適切な時代に、適切な発明を生み出さなければ、その文明は必ずと言ってもよいほどに停滞してしまう。だからシミュレーターの管理を担う僕たちは、時折外部から文明を触発し、発明で活性化してやらないといけない」

「農業みたいね」

「その通り。僕たちはそういう文明に対する活力剤を^{アドイン}拡張機能と呼んでいる。電磁気学、原子力工学、計算機科学……人類の文化に合わせた適切な^{アドイン}拡張機能をシミュレーターにインポートしていくことで、人類は効率よく、短時間で文明がすくすくと成長する」

「つまり……インテリジェント・デザイン*8が正しいって？」

「素晴らしい、ムー読者は話が早くて助かるねえ。あながち間違っていないけど、僕たち管理者は自ずから文明に手を加えやしない。なぜなら、これは発明が生成されるまでの振る舞いを、観察するためのシミュレーションだからだ。例えばさっきの、シミュレーションからスナップショットを取得する技術そのものに関しては、つい最近僕が導入した^{アドイン}拡張機能だ。だがシミュレーターの停止というヒントから、ポータルという新しい技術を生み出したのは、紛うこと無く人間の研究者であって、僕の成果ではない」

「なるほど。あくまでアドインはきっかけで、発明そのものは発明家に任せ

*8 宇宙自然科学のシステムは「知性ある何か」によって設計されたとする思想。その「何か」は人によって、全知全能の存在とも、空飛ぶスパゲッティ・モンスターとも解釈される。

る……。でもアドインっていうのは、そんなお手軽に追加できるものなの？」

「簡単だよ。拡張機能管理サーバの Mímisbrunnr ^{ミームイスブルナー} まで足を運んで、管理者
に対価を支払えばいい」

「対価って？」

「僕の右目」

「……それってめちゃくちゃ重くない？」

「奴隷の片目なんて、神々にとっては鶏の卵より安い犠牲だよ。Óðinn ^{オージン} 先生
もそうやって知識を渴望するため片目を失い、僕も自分の意志でそうしただ
けのことさ。まゝ自分自身を生贄に捧げて知識を得る手段もあるけど、それ
は本当に絶命する危険があるからねえ」

「何ていうか、ここの世界観ってさ」

「うん」

「人類と比較して多少は文明が先行しているのかもしれないけど、時折奴隷
とか、生贄とか、犠牲とか、突如として倫理観が野蛮になるのはどうしてな
のかしら」

「そりゃそうさ。文明と倫理が必ずしも足並みを揃えるわけではないからね」

＊

「それじゃあ改めて、時系列に従って話を進めよう。まず 19 年前の 2020
年、僕は当時シミュレータ上で大流行していた感染症の拡大状況を調査報告
するため、シミュレーターを停止・早送り・巻き戻しする機能を必要として
いた。それを Mímisbrunnr ^{ミームイスブルナー} に頼んだら、僕は片目を犠牲にして、そのよう
なアドインが新たにシミュレーションへと追加された。それから 5 年後。帝
京令和大学の研究チームたまたまシミュレーションの停止と物体の移動とい
う観点に目をつけて、テレポーテーション技術として昇華した。おそらく彼
らは原理も分からず、何故うまく動くかも分からず、たまたま実験に成功し
てしまったんだ」

「なるほど……。えっ、19 年前？」

「うん？」

「貴女って今いくつよ？」

「え？ 13歳だけど……ああ。それは『君たちに』とっての19年前だ。このシミュレーションは現在の時間軸に対して12倍速で加速してるから、僕にとってほんの一年半前の出来事さ」

「へー12倍……ちょっと待って、12倍？ えっ？ じゃあ今、もうここに来て1時間ぐらい経ったから……」

「向こうはもうとっくにもう夜中だね」

「あっ！」

「どうかした？」

「そうだ、ハムカツ！ あのままじゃ……」

「大丈夫、さっき管理人さんに会社から連絡が飛んで、君が失踪していないか在宅確認が入ったみたいだ。ついでにハムカツが発見されて、今は無事に保護されてるよ」

「そう、よかった……死んでないのね」

「別に気に病む必要はないさ。どうせ今更シミュレーター内部の生活なんか考えても仕方がないよ」

「貴女にとってはそうでしょうね。でも、わたしにとってはちゃんと帰る家の環境なの」

「それなら尚更、早く帰るに越したことはない。説明が長引けば長引くほど君は浦島太郎状態になる」

「……確かに。それは困るわね」

「では続けようか。それで、このテレポーテーションという技術には重大な欠陥がある」

「欠陥？」

「シミュレーションサーバへの負荷が高すぎるんだ」

「どういうこと？」

「さっきテレポーテーションはカットアンドペーストと言っただろう？ つまりペースト先のシミュレーションこそが現実として動作するが、カットされた側のシミュレーションはサスペンドされたまま、メモリを開放せずに残

り続けるんだ」

「つまり1回ポータルを利用するたびに、ゴミと化した世界のサスペンドが1つ生まれる……」

「その通り。1日に数回利用する程度なら問題ない。だがポータル中心社会の人間界では、1日約三千万ものゾンビシミュレーションが淡々と生成され、それらは二度と呼び出されることもなく、計算機のメモリを黙々と食いつぶしている。こうしているとある日、突然^{アウト・オブ・メモリー・キラー}OOM Killerが発生し、シミュレーターは強制終了を迎えるだろう。君たちは自覚もなく存在ごと消失し、僕は責任を取って、文字通り首が飛ぶ。これが現状で考える最悪のシナリオだねえ。さて、ここまで聞いておいて君たちはどう思う？」

「なるほど……大体話をつかめたわ。じゃあ何か解決策はないのかしら」

「なに、解決は簡単さ。現時点でのシミュレーションのバックアップを取って外部に保存し、このシミュレーターを再起動すればいい」

「なんだ、それでいいじゃない」

「ところがどっこい。これを見てほしい」

「これはまさか……内部で端子の曲がったUSB2.0ポート？」

「僕の前任者はガサツで野蛮な奴隷でね。よくUSBポートを上下逆さまに押し込もうとするから、ある日ひん曲がってこうなったそうさ。これでは外部記憶媒体に保存できない」

「なんてはた迷惑な。USB3.0 Type-Cならわたしたち人類が減ぶことはなかったのに……」

「このペースだと残り約1ヶ月ほどでOOMが発生する。とにかく時間がない。そこで賢い僕は、文字通り脳味噌と手持ちの工具を使って、こういう方法を考えた」

彼女は何かよく分からない、電極のたくさんついた帽子を頭に取り付け、先程の3番モニタに大量に謎の文字列を表示させました。見たことのないフォントで書かれた、見たことのない文字列です。

「何これ、PSI *9……？」

「なぜ君の歳でそれを知っているんだ？ これはポータル間転送技術による古の発明品の一つで、エギルの兜と言う。サーバから脳の記憶領域に直接データの書き込みが可能なデバイスだ」

「え、脳？ どういうこと？」

「実は人間の脳というのは極めて空間効率、電力効率の良い記憶領域だということが広く知られている。シミュレータ側でバックアップ情報を符号化してから超高密度圧縮して、記憶容量の限界である約1ペタバイトの情報に圧縮してから、各バイナリ情報をシナプスに直接転送する」

「じゃあつまり、わたしたちの脳みそが記憶領域になるってこと？」

「そゆこと。それじゃ、実際にやってみようか」

「えっ、そんな気軽に……」

「ここに今朝用意したバックアップが存在する。^{オージン}Óðinn先生から頂いたこのルーン魔術起動式に従って実行すると……」

エンターキーを叩いた直後にパチッ、という大きな音がしたかと思うと、少女は大きく後ろにのけぞり、頭をブルブルと震わせました。

「だ、大丈夫？」

「……へ、平気だ、ちょっと痛いけど。いま脳内に1ペタバイトのシミュレーションデータを書き込んだ。ではこれを逆に読み出してみよう。すると……」

「あら……エラーコードは読めないけど、これって読み込み失敗？」

「その通り。これはバックアップデータが破損している。原因は脳に備わった『忘れる』という機能によるものだ。書き込まれた直後は記憶を維持できるものの、僕の脳はこれを不要な情報として判断するため、すぐに忘れてしまう。これでは再起動が終わるまで記憶が維持されないから、結局のところ人類滅亡の運命に変わりはない」

「なるほど、なるほど……」

*9 Perfect Salvation Initiation の略。通称ヘッドギア。某宗教団体における教祖の脳波を再現した装置。信者はこれを四六時中装着することで熱心な修行に励んでいた。

「ということでざっくりまとめると、ポータルを使いすぎで人類滅亡の危機、でも管理者からは何もできない、後は指を加えて待つしか無い、というところかな。さて、これで僕の話はおしまいだ。質疑応答を受けつけよう」

「この JP-5963 ポータルはあえて開放していたの？」

「そうだねえ。誰でもいいから人間にこのポータルを見つけてもらって、この哀れな人類滅亡に至る顛末を話したかったという僕のエゴさ」

「もう人類は助からないの？」

「メモリリークする X デーまでに画期的なバックアップ方法が見つからなければ、おそらくそうなるだろうね」

「それじゃ、わたしはどうなるの？」

「何だって？」

「わたしはシミュレータ上の人間のはず。でもいまここに物体として存在している。もし今サーバが再起動したら、わたしはどうなるの？」

「それは……大丈夫だ。僕は先程『君たちがこの箱の中身で動く』と表現したが、正確には、このサーバを使って君たちの世界を参照しているに過ぎない。すなわち、シミュレーションの実態そのものはこの次元のどこかに存在し、僕はこのサーバを使って現実世界とシミュレーションを紐付けているだけだ。君は仮想空間からこの空間に呼び出された時点で、すでに我々の世界の住人として受け入れられている。そう考えてもらって差し支えない」

「ということは、サーバを再起動してもわたしに影響はない。ここには二人の人間。脳にデータを移植、時間によって揮発……。貴女、ちょっとさっきの、ええっと、ルーンなんとか……」

「ルーン魔術起動式？」

「そう。それを読ませてもらっていい？」

「どうぞ」

「なるほど……この列はどういう意味？」

「 R は車輪や旅を指すルーン文字で、つまり指定したアドレスからアドレスへのデータの移動を表す。その後は 2 つの引数を取っていて、前者はサーバのアドレス、後者は脳の記憶領域のアドレスを指している」

「実質 MOV か。この列は？」

「イは欠乏、忍耐だね。ここで書き込みが終了するまで1秒間待機している」

「これは sleep……。じゃあこれは？」

「イは死、再生。記憶領域を一時的に解放する」

「あー、はい分かった分かった。free ってことね。で、ここは処理が戻ってから GOTO で、これが演算ね。言語は違うけど、結構 BASIC とかに書き方が近いっぽい……。で、命令パターンもそこまで多くない。はいはいはい……」

「何かひらめいた？」

「ええ、ひょっとしたら……できるかも。助かるかもしれない。一人ではできないけど、二人ならできる。わたしたちで構成するのよ」

「何を？」

「RAID1、をね」

Conclusion

【女性 A (20 代) と女性 B (10 代) による会話記憶】

【再生開始】

《いやー……ここに至るまで長かったわね》

《ずいぶんとかかったねえ。OOM Killer もあと 2、3 日遅かったら危なかったかもしれないねえ》

《一人月で仕上げたプロダクトとしては及第点かしらね》

《それにしても、まさか僕たちの脳みそ同士を接続するなんてね……。こんなアイデア、一人じゃ到底思いつきもしなかったよ》

《原理は難しくないもの。まずルーン魔術起動式でわたし達の脳にシミュレーション圧縮情報をインプット。それから頻繁に互いの脳内情報同士で Diff を取得して、損失している情報を相手に補填。これを繰り返すことでデータの完全性が保たれる。なんてことはない、よくある RAID1 構成よ》

《とはいえ君の学習スピードは見事なものだったねえ。ルーン魔術式とプログラミング言語との親和性を即座に見出して、魔術が一切使えないにも関わ

らず、新たな起動式を生成するとは驚かされたよ》

《え？ ああ、そういう仕事をしてたから、たまたま役立っただけよ。もう書き直し不可能な石版エディタだけはもう勘弁してほしいけど》

《それじゃ、そろそろ始めるかい？》

《そうね。一応手順を確認しましょ。まずシミュレータからバックアップデータをエクスポートして、それをわたし達の脳へと送信してから、サーバを再起動。その期間は脳への負荷が非常に大きいから、睡眠中枢神経を刺激することで、わたし達は再起動終了までの1ヶ月ほどぐっすりと同じ眠りにつく。その後は自動的に脳からデータを引き出して、サーバにインポート。成功すれば、無事に再起動直前の状態を引き継いで人類史は再開。失敗すれば、わたし達は頭がクルクルパーになって何もかも終わりね》

《ああ、問題ない。データの損失率は？》

《実験記録からすると、だいたい1日で1ポイントってところかな。1ヶ月で損失率が約30パーセントだから、これなら誤り訂正符号でギリギリ修復できるわ》

《オーケー。あとは実験結果を信じよう》

《それじゃ、兜は装着した？……じゃあ、あとはエンターキーを押すだけね》

《いやー……それにしても、君にとっては災難な1ヶ月だったねえ》

《そうね。食事は貴女が普段食べるジャンクフードのおすそ分けだし、地面は食べ残しのゴミだらけだし、寝床は古びた薄い布切れ1枚だし、不満点しか見つからない最高の開発環境だったわ》

《まあまあ、そうツンケンしないでおくれよ。人の家にお泊りして、夜が明けまでおしゃべりしたりなんてのは、君にとっても久しぶりに楽しい経験だっただろう？ ね？》

《それは否定しないんだけど……》

《おっと、無駄話に花を咲かせていると決断が鈍ってしまうねえ。さっさと起動しようか》

《そうね。その前に一言聞いても良い？》

《何かな？》

《以前貴女は、このポータルに来る人間なら誰でも良いと言っていたわよね》

《確かそうだねえ》

《だけど本当は、他の誰でもない、わたしに来てほしかったんじゃないのかな》

《ほう、何を根拠に？》

《だって、以前からわたしのことを観察していたんでしょ？ PTS エンジニアのわたしがたまたまやってきて問題解決する筋書きなんて、あまりにも都合が良すぎるもの。ここのポータル番号もわたしの暗証番号だし》

《へえ。まあ……それはご想像にお任せするよ。ひょっとしたら1ヶ月前のあの日、君はたまたま定期を紛失したのかもしれないし、たまたまこの違法ポータルを見つけた世界初の人間が君だったというだけかもしれない》

《なによ、つれないわね》

《次は僕の番だ。僕からも一つ。君がエンターキーを押す前にお願ひがある》
《何かしら》

《僕たちがこれから眠る前に……て、手を……握っていてほしい》

《手？ これでいいかしら。うわ、手汗でびしょり》

《ぼ、僕はこれでも緊張しているんだよねえ。今から1時間後に僕の海馬はショートを引き起こし、君を認識できないほどの記憶障害を引き起こすかもしれない。別に君以外の誰の手でも握れば構わないが、あいにくこの部屋には君しかいないからね。一時的な安心感が得られればそれでいい。そしたら用済みだ》

《ふふ、可愛くない奴め。それじゃあ、心の準備はいい？》

《ああ、よろしく頼む》

《じゃ、始めよっか……はい、押した。あ》

《どうした》

《お手洗い行きそびれた》

《起きてから行きたまえ……》

【再生終了】

＊

「ふむ……」

「ということで所長。以上が録音記録になります」

担当者は音声の再生を中止し、手元の資料に関する説明を続けた。

「後にご存知の通り、昨日の深夜頃からリージョン JP-3 サーバに急激な高負荷が発生。現在オンデマンド増設作業を勧めてはいるものの、他のシミュレーションは停止せざるを得ない状況です」

「まさか^{エス・ピー} SP *10と^{エス・ツーツー・ピー} SSP *11の接触は世界でも珍しい事例だからといって観察を許可したが、いやはや、まさかこんなことになるとは……」

「仕方ありません。彼女らは脳内情報を 1 秒間に 10 回も転送しています。SP 自身がここまでサーバに負荷をかけるような作業を実施したことはないですからね」

「何とかタスクキルできないの？」

「できますが、後処理が面倒ですね。すでにエスピー・ライツ*12が嗅ぎつけているんで、のちのち責任問題に発展する可能性が高いかと」

「あちゃー……じゃあしょうがないか。あとどれくらい？」

「シミュレーション内部時間において残り 1 日なので……こちらでは残り 2 時間ほどです」

「わかった、それまで何とか凌いでくれ。それから後でシミュレーター全利用者のリストを私の端末まで送ってくれ。利用者には私から伝えておく」

「承知しました、所長」

部下らしき男が部屋を出ていった後、上司はむかむかと紫煙をくゆらせた。「まったく、ウチの仮想環境リソースを^{タダ}無料でこんなに使えるなんてな！ アンタら 2 人は大した幸せもんだよ……」

*10 シミュレーテッド・パーソンの略。シミュレーションによって管理されている人間

*11 シミュレーテッド・シミュレーテッド・パーソンの略。「シミュレーションによって管理されている人間」によって管理されている人間

*12 シミュレーション上で動く人間に対しても人権は存在するものとして、権利を主張する過激派団体。

法律で認められている範囲を超えた無断複製・無断転載を禁じます。

書名 いっぱいテキストビュー（別冊）
発行日 2020/05/06
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 （電子書籍版のため省略）
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net
